

第九講 問題の提出 (三) 第一章十六、十七節の研究 (三月十三日)

前講に於て説きし如く第十七節の中心問題は「義」である、神の義が福音に於て顯はれたと云ふが其主眼である、原文に於て「義」なる語が眞先に出て居るに注意すべきである、神の能も恩恵も其義を離れては加へられぬと云ふのである、福音を單なる恩恵又は愛の教と解すべきでない、義が儼然として其根柢をなして居るのである、そして單に此十七節が然るのみならず羅馬書全體が此「義」を根柢として居るのである。

「神の義」の眞意如何にして夫が福音に於て顯はるゝか、此問題に就ては學者間に諸説紛々たる有様である、委細は第三章後半に至て明瞭となる事である故茲では一つの注意だけに止めて置く、抑も「我は福音を耻とせず」と斷じたるパウロは、其理由として「此福音はユダヤ人を始めギリシア人凡て信ずる者を救はんと神の力たればなり」と云ふた、然るに彼は之を以て尚ほ不充分なりと感じて「神の義は之に顯はれて信仰より信仰に至ればなり」と附加したのである、福音は萬人を救ふ神の力であるのみならず此福音に於て神の義が顯彰せられて居ると云ふのが彼の主張である。

神の力である又彼の義である、義であるが故に力である、神に在りては義ならざる者は力でない、福音は神の力であると云ひて、勿論彼の腕力ではない、又此世の所謂權力ではない、神の義である、故に其力の顯彰である、人に在りては力が義と離れて存在する場合が尠くない、然れども神に在りては力即ち義である、義即ち力である、キリストの福音が人を救ふ爲の唯一の力である理由は、それが最も瞭かに神の義を顯はすからである、義を以て

動く力であるが故にパウロは福音を耻としなかつたのである。

「信仰より信仰に至れり」と邦譯聖書にある句は原語聖書に於ては唯「信仰より信仰にまで」とあるのみである（*ἐκ πίστεως ἐκ πίστεως* 英語 *from faith to faith*）、かく簡單なる一句なるがため其解釋區々たる有様である、或は「素朴なる信仰より精練せられたる信仰にまで」となし、或は「信仰より出發して信仰を以て終る」となし、或は「舊約的信仰より新約的信仰にまで」となし、或は「神が人を信ずる事より人が神を信ずる事にまで」となし、或は「（神の義は）信仰より發し信仰を以て獲得せらる」となす、其他異說頗る多い、之に決定的判斷を與ふるは難い事であるが其主眼とする所は不明ではないと思ふ。

邦譯聖書が「神の義は之に顯はれて信仰より信仰に至れり」と意譯せるため、「信仰より信仰に至れり」の句を「神の義」と引き離して、單なる信仰の進歩を意味すとなす通俗的見解が起つた、併し原文に於ては「神の義は之に於て信仰より信仰にまで顯はる」とあるを見れば、信仰云々の句は神の義の顯彰と密接に關係せる事は明かである、且又原文の文脈に照して見る時「信仰の進歩」と云ふ見方は此場合には不適當であると云はねばならぬ、茲に於て我らは思ふ、パウロは此句に於て神の義は信仰に依て受け、信仰によつて保ち、信仰によつて完成する者なる事を意味したのであると。

前にも説きし如く「神の義」とは神より人に與へらるゝ義、神より顯はし給ひし義であつて、人の努力の産物たる人の義ではない、人は自己の行や功に依らずして唯信仰のみに依て神に義とせらるゝのである、即ち神の義を信仰に依て受けるのである、これ人に與へらるゝ大なる恩恵にして又人の抱ける大なる特權である、如何な

る人と雖も一度齟つて父なる神と主イエスキリストとを信するに至れば、その信仰といふ一事を以て罪を赦されて義とせらるゝ恩恵に浴するのである、然らば此恩恵の繼續のためには自己の努力を必要とするか、否なたい主キリストを仰ぎ瞻る信仰を以てのみ足る、即ち義を持続する道は、そして聖められ進む道は唯信仰を保つのみである、換言すれば信仰によつて義とせられし後の生涯は信仰によつて聖められるのである、即ち神の義を信仰によつて保つのである、然らば此義は如何にして完成さるか、人の努力に依るか、否然らず、唯イエスを仰ぎ瞻る信仰の結果として與へらる、換言すれば信仰に依つて義とせられ信仰に依て聖めらるゝ生涯は、其終に於て信仰に依て榮化さるゝのである、榮化は義の完成である、即ち神の義は信仰によつて完成さるるのである。

右の如く神の義は信仰によつて受け、保ち、完成さる、これ「神の義は信仰より信仰にまで（顯はる）」の意味である、信仰を以て始まり、信仰を以て進み、信仰を以て終る、其最始に於て其中道に於て其最終に於て——其凡てに於て信仰中心である、信仰に入り其信仰を持続すると云ふ唯の一線の上に宇宙間に於て凡そ人に加へられ得る最大の幸福が與へられるのである、これを傳ふるが福音である、故に餘りに良過ぎる音信である、從つて之を信するを躊躇する人が多い、併し神の恩恵は宇宙に充ちて居るではないか、神の愛は萬物に溢れて居るではないか、天より露を下して草木を濡ほし野の鳥に生の歡喜を豊高く歌は占め給ふ神は、無限の恩寵を人に與へんとして常に準備し給ふのである、たゞ之を受くべき人が心足らずして或は頑執を以て之を斥け、或は空しき努力の幽谷に彷徨して受くべき唯一の資格に思ひ到らないのである、受くべき唯一の資格なる信仰を抱かざる時に於ては、與へんとして待ち給ふ天父も遂に與ふるに道がないのである。

然りたゞ信仰である、信仰を以て始終一貫するのである、「地獄に落つるとも飽くまでキリストに依り頼まん」とバンヤンは叫んだ、此世に於ても後の世に於てもキリストに依り頼みて變らざる信仰である、此信仰の持續ありて義とせられ、聖められ、榮化せらる、言ひ換へれば信仰の故に義は與へられ、保續せられ、完成せらる、救ひは義を根柢とし信仰の故に實成するのである、然らば此義は何故に信仰によりて與へられ、保たれ、完うせらるゝか、此義と神の愛との共存する理由如何、之を明白に解明したのが羅馬書である、羅馬書研究の價值と興味は茲に在る、委細は後に出づる所、今は唯問題として提起せられたのである。

パウロは十七節の最後に「録して義人は信仰によりて生くべしと有るが如し」と云ふた、彼は例に依て聖句を引き來つて其所説を裏書せしめたのである、彼は其書翰の凡てに亘つて聖句を引用すること實に多い、これ彼が舊約聖書に熟通して居たことを語るのみならず、彼が如何に聖書を神の言として尊敬して居たかを示すものである、彼は常に自己の斷定を支持するために聖句を用ひ、聖句に斯くある上は其事に疑なしと云ふが如き筆法を用ひるのである。

「義人は信仰によりて生きん」とはハバ谷書二章四節よりの引用である、パウロは同一の句を加拉太書三章十一節に於ても引用してゐる、多分これは彼の特愛の句にして彼が暗黒を脱して光明に入るに於て大に力となつた語であると思ふ、哈巴谷書二章四節は云ふ、

視よ彼の心は高ぶり其中にありて直からず、されど義しき者は信仰によりて活くべし。

と「彼」とは誰か、或人はカルデヤ人と見、或人は不信のユダヤ人と做す、何れにしても「義しき者」と對立す

る心高ぶれる輩を指すのである、されば「義しき者」とは信仰に立つユダヤ人を指したのである、高ぶれる徒輩が直からずして滅亡に向て急ぎつゝあるに義しき者は信仰に由て生きんと云ふのである、神に背く者に來る必滅と彼に依頼^{（まよ）}む者の受くる生命とは預言者の語に於て鮮かに對比せられたのである、「義しき者は信仰によりて活くべし」と、語それ自身が偉大なる語である、そして之を汚濁なる世相を前にして發したる預言者の確信として眺むる時、その傳ふる精神の壯烈と思想の高貴とは強く我等を打つのである、パウロは此偉大なる語を引用し來つて之を羅馬書の大精神として掲出したのである。

「政治家は政略によりて生く」と云ふ語を以て現代政治界の實状を云ひ表はす事が出来る、曾ては政略によりて生きざる政治家のあつた事もあるが今や之を見出すことは殆ど不可能である、孰れも政略を以て終始し之により巧なる者はより拙なる者に勝つが政界の實状である、又「商人は利益によりて生く」と云へば能く彼等の實状を道破したのである、物的利益は實に彼等の唯一の目的にして彼等の一舉手一投足は専ら之がために動くのである、同じ意味に於て「軍人は武力によりて生く」と云ふことが出来る、「學者は知識によりて生く」と云ふことが出来る、之等は孰れも社會の實状である、今之等の語と相對して「義人は信仰によりて生きん」との語を見よ、その高貴なる語なることは極めて明瞭である。

今や基督信徒と稱する者にして政治家の如く政略に由て生き、商人の如く事功をのみ貴び、軍人の如く此世の力を重んじ、學者の如く此世の知識に頼る者少からぬは遺憾の至である、これ實に此世に降參して「此世の子等」の姿態^{すがた}を學ぶことではないか、イエスは荒野の試誘^{こころみ}に於て惡魔の勸むる此世の智慧や手段を悉く斥け去つた、彼

を信ずる者も亦然あらねばならぬ、只信仰のみに生きんとは我等の堅き決心でなくてはならぬ、信仰のために如何なる不利益に陥り如何に多くの犠牲を拂ふとも、之を以て生涯を貫かんとの強固なる覺悟は基督者の日常の所有物でなくてはならぬ、「涙の谷を過ぐれども其處を多くの泉ある所とな」し、「惡の幕屋に居らんよりは寧ろ我神の家の門守かどもりとならん」ことを切に願はねばならぬ、キリストの爲に迫めらるゝを以て大なる歡喜よろこびとなし「我は永とこへにエホバの宮に住まん」との更からぬ決意を抱かねばならぬ、この心あらば政治家たるも商人たるも學者たるも可なりである、然る時は政略に由て生きず利益に由て生きず知識に由て生きず、實に信仰によりて生くるのである、我等は如何なる職業に従ふとも信仰によりて生くる人たらねばならない。

「義人」の意義如何、又「生きん」の意義如何、如何なる罪ある者も信仰によりて罪を赦されて義とせらるゝと云ふのであるから寧ろ「罪人は信仰によりて生きん」と云ふ方可なりと思ふ人があるかも知れぬ、又「世の人こそりて神の前に罪ある者」である以上一人として義人はない筈であると云ふことも出来る、併し乍ら茲にパウロが義人を以て意味するのは、かの自らを以て義とするパリサイ的義人でないと共に何等罪を犯すことなき道德的に完全なる者ではない、完全に義しき人は此世に於ては一人もない、抑も羅馬書は信仰を以て義とせらるゝ事を説くを以て主眼とする、故に此場合預言者ハバククの語を引用せし際に於てもパウロは「義人」の一語の中に此一事を含蓄せしめたに相違ないと思ふ、即ち道德的に神の前に完全に義しき義人にあらず、信仰を以て神に義とせられたる義人である、パウロはそれを意味したのであると思ふ、次に「生きん」の語に於て意味する處は現代人の意味する所の如く茫漠たるものではない、「生命」の一語は即ち永生えいせいを意味するのである、されば「生きん」

の一語は「限りなく生きん」を意味するのである（ヨハネ傳六章五七、五八節參照）、即ち滅亡を免かれて永遠の生命に入ることの意味するのである。

「義人は信仰に由りて生きん」を原文のまゝに排列する時は、

義人は 信仰に由り（由る） 生きん

となる、「信仰に由り（由る）」の句は眞中にあるため之を「信仰による義人は生きん」と讀むも文法的には合理である、されば「義人は信仰に由りて生きん」と讀むも「信仰に由る義人は生きん」と讀むも文法上には何等の故障はないのである、従つて意味の上に於て孰れを採るべきかの判斷をすることとなるのである、英譯邦譯共に前者を採つて居るが、後者を採る方パウロ神學に適ふと做す學者も相當に在るのである、ハバククの意味が前者にあつた事は學者の一樣に認る處であるが、之を引用した時のパウロの意味については二つの見方に分れるのである、されば此引用文の讀み方如何は學者間に於ては可成り面倒な問題の一である。

思ふに「信仰に由り（由る）」の句を前へも後へも關係せしめて「信仰に由る義人は信仰に由りて生きん」と讀むはパウロの眞意に最も近きものではあるまいか、文法的に斯く一の句を二度讀む事が許さるゝか如何は知らず、たゞ文法などに拘泥せざるパウロの眞意を探らんとせば此讀み方が最も合適であると思はれる、抑もパウロの意味する義人は「信仰に由る」義人である、信仰に由りて義とせられし義人である、かゝる義人は又「信仰によりて」生くるのである、信仰に由て義とせられ信仰に由て生く、これパウロの意味における基督信者である。

もし此見方にして成立するならば此一語は實に羅馬書の主要部たる第一本館（一章より八章まで）の主意を表

明したものである、そして第一本館は實に羅馬書の最主要なる部分なるが故に、此一語は羅馬書の大趣意を表明したものであると云ひ得るのである、そして前にも説きし通り第一本館は、

第一、義とせらるゝ事（一章十八節―五章）

第二、聖めらるゝ事（六章、七章）

第三、榮化せらるゝ事（八章）

の三に分たるゝのであるが、「信仰に由る義人」の一句は第一に當り、「信仰に由りて生きん」の一句は第二第三に該當するのである、即ち「信仰に由る義人」とは信仰に由て義とせられし基督者を指すので一章十八節―五章に當り、「信仰に由りて生きん」は此世より來世に亘る永生を意味するので、聖めらるゝ事と榮化せらるゝ事（六章より八章まで）に當るのである、されば「信仰に由る義人は信仰に由りて生きん」の一語は實に羅馬書の第一本館の模型と云ふべきである、此一語を先ず掲げたるパウロは之を引き伸ばして第八章までの大論述を爲したのである、そして一章―八章は實に羅馬書の主體であつて第九章以下は其附随物であるが故に、此一語は實に羅馬書を壓搾せし者と稱し得るのである、十六節、十七節が羅馬書の主題提示で羅馬書の縮圖であるが、その主題の最後にある此一句はさらに小なる其縮圖と云ふべき者である、我等は此一小句に深甚なる注意を拂ふべきである。

前回の講義で述べたように、第十七節の中心問題は「義」である。神の義が福音において現れたというのがその要点である。原文では「義」という語が最初に登場していることに注意すべきである。神の力も恵みも、その義を抜きにしては与えられないというのである。福音を単なる恵みや愛の教えと解釈すべきではない。義が厳然としてその根底をなしているのである。そして、ただこの十七節がそうであるだけでなく、ローマ書全体がこの「義」を根底としているのである。「神の義」の本当の意味は何であり、それがどのように福音において現れるのか。この問題については、学者たちの間で様々な説があり、意見が分かれている。詳細は三章の後半に至って明らかにすることなので、ここでは一つの注意点にとどめておく。そもそも「私は福音を恥としません」と断言したパウロは、その理由として「福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です。」と言った。しかし、彼はこれではまた不十分だと感じて、「福音には神の義が啓示されていて、信仰に始まり信仰に進ませるからです」と付け加えたのである。福音はすべての人を救う神の力であるだけでなく、この福音において神の義がはっきりと示されている、というのが彼の主張である。福音は神の力であり、また神の義である。義であるからこそ力なのである。神においては、義ではないものは力ではない。福音は神の力であるといっても、もちろん神の腕力ではないし、またこの世という権力でもない。それは神の義である。それゆえ、その力の現れなのである。人間においては、力が義から離れて存在する場合は少なくない。しかし、神に

においては力すなわち義であり、義すなわち力である。キリストの福音を人が救われるための唯一の力である理由は、それが最もはつきりと神の義を示すからである。義をもって働く力であるからこそ、パウロは福音を恥としなかったのである。

「信仰に始まり信仰に進ませるのです」という邦訳聖書のこの句は、原語聖書では単に「信仰から信仰にま^{エク・ピストオース・アイス・ピスチン}で」(ek pisteos eis pistin、英語で from faith to faith)とあるだけである。このように単純な一句であるため、その解釈は様々である。ある者は「素朴な信仰から洗練された信仰にまで」とし、ある者は「信仰から出発して信仰で終わる」とし、ある者は「旧約的信仰から新約的信仰にまで」とし、ある者は「神が人を信じることから人が神を信じることにまで」とし、ある者は「(神の義は)信仰から発し信仰によって獲得される」とするなど、他にも異説はかなり多い。これに決定的な判断を下すのは難しいことであるが、その主眼とするところは不明ではないと思う。

邦訳聖書が「神の義は之に顯はれて信仰より信仰に至れり」と意識したため、「信仰より信仰に至れり」の句を「神の義」から切り離して、単なる信仰の進歩を意味する、という通俗的な見解が生まれた。しかし、原文では「神の義はそれにおいて信仰から信仰にまで啓示される」とあるのを見ると、信仰に関する句は神の義の顕彰と密接に関係していることは明らかである。加えて、原文の文脈に照らして見るとき、「信仰の進歩」という見方はこの場合には不適当であると言わざるを得ない。ここで我々はこう思う。パウロはこの句において、神の義は信仰によって受け、信仰によって保ち、信仰によって完成するものであることを意味したのである、と。

前にも述べたように「神の義」とは、神から人に与えられる義、神から現し示された義であって、人間の努力の産物である人間の義ではない。人は自分の行いや功績によらず、ただ信仰のみによって神に義と認められるのである。すなわち、神の義を信仰によって受け取るのである。これは人に与えられる大きな恵みであり、また人が抱く大きな特権である。いかなる人であっても、一度立ち返って父なる神と主イエス・キリストを信じるに至れば、その信仰という一つの事によって罪を赦され、義と認められる恵みに浴するのである。では、この恵みを継続するためには、自己の努力を必要とするのか。否、ただ主キリストを仰ぎ見る信仰のみで足りる。すなわち、義を持続する道、そして聖められ進む道は、ただ信仰を保つのみである。言い換えれば、信仰によって義とされた後の生涯は、信仰によって聖められるのである。すなわち、神の義を信仰によって保つのである。では、この義はどのようにして完成されるのか。人間の努力によるのか。否、そうではない。ただイエスを仰ぎ見る信仰の結果として与えられる。言い換えれば、信仰によって義とされ、信仰によって聖められる生涯は、その終わりに信仰によって栄化されるのである。栄化は義の完成である。すなわち、神の義は信仰によって完成させられるのである。

右のように、神の義は信仰によって受け、保ち、完成させられる。これが「神の義は信仰から信仰にまで（啓示される）」の意味である。信仰をもって始まり、信仰をもって進み、信仰をもって終わる。その最初においても、その中途においても、その最終においても―そのすべてにおいて信仰が中心なのである。信仰に入り、その信仰を持続するというただ一筋の線の上に、宇宙間においてすべての人に与えられ得る最大の幸福が与えられる

のである。これを伝えるのが福音である。それゆえ、あまりに良すぎる知らせである。したがって、これを信じることを躊躇する人が多い。しかし、神の恵みは宇宙に満ちているではないか。神の愛は万物に溢れているではないか。天から露を降らして草木を潤し、野の鳥に生の喜びを声高く歌わせる神は、無限の恩寵を人に与えようとして常に準備しておられるのである。ただこれを受けるべき人が心が足りずに、あるいは頑なさをもってこれを拒み、あるいは空しい努力の幽谷をさまよって、受けるべき唯一の資格に思い至らないのである。受けるべき唯一の資格である信仰を抱かないときには、与えようと待っておられる天の父も、ついに与える道がないのである。

その通り、ただ信仰である。信仰をもって始終一貫するのである。「地獄に落ちるとも飽くまでキリストに頼りきろう」とバニヤンは叫んだ。この世においても後の世においても、キリストに頼りきって変わらない信仰である。この信仰の継続があつて、義とされ、聖められ、栄化させられる。言い換えれば、信仰のゆえに義は与えられ、保持され、完成させられる。救いは義を根底とし、信仰のゆえに実現するのである。では、この義は何ゆえに信仰によって与えられ、保たれ、全うされるのか。この義と神の愛とが共存する理由は何か。これを明白に説明したのがローマ書である。ローマ書研究の価値と興味はここにある。詳細は後に出てくること、今はただ問題として提起されたのである。

パウロは十七節の最後に「それは、『義人は信仰によって生きる』と書いてあるとおりです」と言った。彼は例によって聖句を引用してきて、自分の主張を裏付けさせたのである。彼はその手紙のすべてにわたって聖句を

引用することが実が多い。これは彼が旧約聖書に熟知していたことを語るのみならず、彼がいかに聖書を神のこ
とばとして尊敬していたかを示すものである。彼は常に自己の断定を支持するために聖句を用い、聖句にこうあ
る以上、そのことに疑いはない、というような筆法を用いるのである。

「義人は信仰によって生きる」とは、ハバクク書二章四節からの引用である。パウロは同一の句をガラテヤ書
三章十一節においても引用している。おそらくこれは彼の特に好む句であり、彼が暗黒を脱して光明に入るにあ
たって大いに力となったことばであると思う。ハバクク書二章四節はこう述べている。

見よ。彼の心はうぬぼれていて直ぐではない。しかし、正しい人はその信仰によって生きる。

と、「彼」とは誰か。ある人はカルデヤ人と見なし、ある人は不信仰なユダヤ人と見なす。いずれにしても「義
しき者」と対立する、心が高ぶった人々を指すのである。それゆえ「義しき者」とは、信仰に立つユダヤ人を指
したのである。高ぶった徒党がまっすぐでなく滅亡に向かって急いでいるのに対して、義しき者は信仰によって
生きるというのである。神に背く者に必ず来る滅亡と、彼に依り頼む者が受ける生命とは、預言者のことばにお
いて鮮やかに比べ示されたのである。「義しき者は信仰によって生きる」と。ことばそれ自体が偉大なることば
である。そして、これを汚れた世相を前にして発した預言者の確信として眺めるとき、その伝える精神の雄大さ
と思想の高貴さは強く我々を打つのである。パウロはこの偉大なことばを引用してきて、これをローマ書の大精
神として掲げたのである。

「政治家は政略によって生きる」ということばをもって、現代の政治界の実際の状況を言い表すことができ

る。かつては政略によって生きない政治家もいたこともあるが、今やそれを見出すことはほとんど不可能である。いずれも政略をもって終始し、これによって巧みな者はより拙い者に勝つのが政界の実際状況である。また「商人は利益によって生きる」と言えば、よく彼らの実際状況を言い当てている。物質的な利益は実に彼らの唯一の目的であり、彼らの一挙手一投足はひたすらそのために動くのである。同じ意味において「軍人は武力によって生きる」ということができ、「学者は知識によって生きる」ということができる。これらはいずれも社会の実際状況である。今、これらのことばと対比して「義人は信仰によって生きる」ということばを見よ。その高貴なることばであることは極めて明瞭である。

今やキリストの信徒と称する者で、政治家のように政略によって生き、商人のように功績のみを尊び、軍人のようにこの世の力を重んじ、学者のようにこの世の知識に頼る者が少なくないのは、非常に遺憾なことである。これは実にこの世に降参して「この世の子ら」の姿勢を学ぶことではないか。イエスは荒野での試みにおいて、悪魔が勧めるこの世の知恵や手段をすべて退け去った。彼を信じる者もまたそうあらねばならない。ただ信仰のみに生きよう、というのが我々の固い決心でなくてはならない。信仰のためにいかなる不利益に陥り、いかに多くの犠牲を払うとしても、これを以て一生涯を貫こうという強固な覚悟は、キリスト者の日常の持ち物でなくてはならない。「涙の谷を過ぎるとも、そこを泉の湧く所と」し、「悪の幕屋に住むよりは、私の神の家の門口に立」つことを切に願わねばならない。キリストのために迫害されることを大きな喜びとし、「私はとこしえに主の宮に住む」という変わらぬ決意を抱かねばならない。この心があれば、政治家であることも、商人であること

も、学者であることも構わない。そうであるとき、政略によって生きず、利益によって生きず、知識によって生きず、実に信仰によって生きるのである。我々はいかなる職業に従事しようとも、信仰によって生きる人でなくてはならない。

「義人」の意味は何か。また「生きる」の意味は何か。どのような罪ある者も信仰によって罪を赦され、義と認められるというのであるから、むしろ「罪人は信仰によって生きる」と言う方が適切だと思う人がいるかもしれない。また「世の人すべてが神の前に罪ある者」である以上、一人として義人はいないはずであると言うこともできる。しかしながら、ここでパウロが義人をもって意味するのは、あの自らを義とするパリサイ的な義人でないと同時に、何ら罪を犯すことのない道徳的に完全な者でもない。完全に義しい人はこの世においては一人もない。そもそもローマ書は、信仰をもって義と認められることを述べることを主眼とする。ゆえにこの場合、預言者ハバククのことばを引用した際においても、パウロは「義人」という一語の中にこの一つの事を含ませたに違いないと思う。すなわち、道徳的に神の前に完全に義しい義人ではなく、信仰をもって神に義とされた義人である。パウロはそれを意味したのであると思う。次に「生きる」という語において意味するところは、現代人が意味するところのように漠然としたものではない。「いのち」という一語はすなわち永遠のいのちを意味するのである。それゆえ「生きる」という一語は「限りなく生きる」を意味するのである（ヨハネの福音書六章五十七、五十八節参照）。すなわち、滅亡を免れて永遠の生命に入ることの意味するのである。

「義人は信仰によって生きる」を原文のままに並べ替えると、

義人は 信仰によって（よる） 生きる

となる。「信仰によって（よる）」の句は真ん中にあるため、これを「信仰による義人は生きる」と読むのも文法的には合理的である。それゆえ、「義人は信仰によって生きる」と読むのも「信仰による義人は生きる」と読むのも、文法上は何の問題もないのである。したがって、意味の上においてどちらを採用すべきかの判断をするこのことなのである。英訳、邦訳ともに前者を採っているが、後者を採る方がパウロ神学に適うと見なす学者も相当数いるのである。ハバククの意味が前者にあったことは学者の一致して認めるところであるが、これを引用した時のパウロの意味については二つの見方に分かれるのである。それゆえ、この引用文の読み方は学者間においては、かなり面倒な問題の一つである。

思うに「信仰によって（よる）」の句を、前にも後にも関係させて「信仰による義人は信仰によって生きる」と読むのが、パウロの真意に最も近いものではないだろうか。文法的にこのように一つの句を二度読むことが許されるかどうかは知らないが、ただ文法などにこだわらないパウロの真意を探ろうとするならば、この読み方が最も適切であると思われる。そもそもパウロの意味する義人は「信仰による」義人である。信仰によって義とされた義人である。このような義人はまた「信仰によって」生きるのである。信仰によって義とされ、信仰によって生きる、これがパウロ的な意味におけるキリストの信者である。

もしこの見方が成立するならば、この一語は実にローマ書の主要部である第一本館（一章から八章まで）の主意を表明したものである。そして第一本館は実にローマ書の最も主要な部分であるゆえに、この一語はローマ書

の大趣意を表明したものであると言えるのである。そして前にも述べた通り、第一本館は、

第一、義とされること（一章十八節～五章）

第二、聖められること（六章、七章）

第三、栄化させられること（八章）

の三つに分かれているが、「信仰による義人」の句は第一にあたり、「信仰によって生きる」の句は第二と第三に該当するのである。すなわち「信仰による義人」とは、信仰によって義とされたキリスト者を指すので一章十八節～五章に当たり、「信仰によって生きる」は、この世から来世にわたる永遠のいのちを意味するので、聖められることと栄化させられること（六章から八章まで）に当たるのである。それゆえ「信仰による義人は信仰によって生きる」という一語は、実にローマ書の第一本館の模型と言うべきである。この一語をまず掲げたパウロは、これを引き伸ばして第八章までの大論述を行ったのである。そして一章から八章は実にローマ書の主体であって、第九章以下はその付随物であるゆえに、この一語は実にローマ書を圧縮したものと言うことができる。十六節、十七節がローマ書の主題提示でローマ書の縮図であるが、その主題の最後にあるこの一句はさらに小さなその縮図と言うべきものである。我々はこの小さな句に深く注意を払うべきである。